

東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 帰国報告

最終報告提出日 2012年8月3日

・派遣生の基本情報

氏名:杉浦清人

所属先:大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻現代文芸論専門分野修士課程

派遣形態:平成24年夏学期推奨プログラム

研究課題名:デジタル技術を用いて世界文学を考える

・派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名:カナダ

都市名:ヴィクトリア

研究機関名:ヴィクトリア大学 University of Victoria

プログラム名:人文情報学夏季講座 Digital Humanities Summer Institute 2012

(2) 派遣期間

出発日:6月3日

帰国日:6月10日

総日数:8日間

・主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

人文情報学夏期講座のコース「デジタル化の基礎と応用」を受講し、文学研究に関わる画像・音声・動画などの資料をデジタル化する方法や、それらを公開する際の注意点などを学ぶ。それによって、テキストの分析にとどまらない文学研究におけるデジタル技術の可能性についての展望を広げる。さらに、デジタル化とは直接関係ない文学理論との比較対照を行うことで、文学研究においてどのような枠組みが望ましく、また実装可能であるかを検討する。

(2) 実際に達成された成果

現在、広く人文学において、デジタル技術の新たな可能性が認められつつあることが、人文情報学夏期講座のようなプログラムが行われる背景になっていると考えられる。特に文学にあっては、テキストのデジタル化が盛んであり、それを基にした文体分析などが行われている。文字情報はデジタル化がしやすいため、テキストを主に扱う文学研究はデジタル化との相性がいいとすることができるだろう。しかし、それにとどまらず、テキスト以外の情報をも扱うことでより研究の可能性が広がると考えられる。よって、受講したコースを通じて、画像・音声・動画などのデジタル化の基礎や、それらを公開する方法について学んだ。講義の後に、自分の関心領域の素材や、予め用意された素材を自分で処理してみる時間が多くとられた構成であった。同じ受講者には、図書館などでデジタル化に実際に関わっている方が多く、現場ではすでにデジタル化が喫緊の課題なのだと思います。

また、コロキウムやアンカンファレンスへの積極的な参加から、文学研究だけでなく人文学の広範な範囲にわたる、世界的な人文情報学の最新の知見を学び、知的刺激を受けることができた。その結

果、この分野は当然ながら未成熟であると感じた。特に興味を持った分野はやはり文学研究である。テキストなどの資料をデジタル化することはできるが、その後どのような分析を行い、どのように解釈するべきかという理論が現在不十分であると考えられる。そこで文学理論、特に世界システム論を援用した世界文学の理論的研究を指針とすることで、デジタル化されたテキストに有効な分析を施すひとつの道筋をデザインするという考えに至った。

以前から人文情報学に関心を持っていたが、日本ではまだ一般的でない分野のため、実際の研究の雰囲気を感じられたことは大きかった。他人の研究の中に、自分が考えていた問題点と似たような問題を発見することで、考えの曖昧だった部分を明確にすることができた。

・今後の研究展望

今回の派遣において、デジタル技術を用いた文学研究と文学理論の接合点をイメージすることができた。今後は、その両方にさらに熟達し、融合を目指していく。

デジタル技術においては、統計的な手法によってデジタル化された文学テキストの語彙や文体を分析する。特に、異なる作家間の類似性に着目することで時代や地域について思考することを目指す。また、地理情報システムを使用して空間的な分析を行う。

理論的には、Franco MorettiやPascal CasanovaやItamar Even-Zoharの、システム論を援用した文学理論に依拠する。これらは空間的であるので、前述のような分析と接合可能である。文学理論から何らかの統計的に検証可能な仮説を導き出し、それを具体的なテキストにおいて検証するのが当面の目標である。